

平成6年度

家庭との連携を図るために

——カウンセリングを生かした母子との係わりを探る——

家庭との連携を 図るために

——カウンセリングを生かした 母子との係わりを探る——

幼児教育長期研修員

野口 栄子¹

研究のねらい

幼稚園は子どもにとって家庭を離れて初めて係わる集団の場になると考えられる。子どもはそのなかで新しい人間関係を築きあげ、家庭のなかでは見られなかった姿を発揮する。母親はその姿を伝え聞いて、わが子の違った側面を発見する。一方、家庭での子どもの様子については母親が一番よく知っている。それぞれの見た子どもについて本音で話し合うことにより、お互いにその子どものことをより深く理解することができるのではないかと考える。そのために教師と母親は様々な方法を用い子どものことを伝え合う努力をしている。しかし、ちょっとした言葉をかかわした時に、うまく通じる場合と、何かが違っていると感じる時とを経験する。教師が感じているように、母親も同じ思いをしている時があると考えられる。この何かが違うという感覚を大切にし、どのようにしていけばお互いの意図することが伝わり易くなっていくのかを考えると共に、幼稚園における教師と母親との連携とはどのようなことを目標にしていくことが望ましいのかを明らかにしていきたいと考え、主題を設定した。

I 方 法

- (1) カウンセリングについての文献研究。
- (2) 家庭との連携についての文献研究。
- (3) 幼稚園での家庭との連携について、事例の分析をする。
- (4) 受理会議・事例会議に出席する。
受理会議に出席し、ケースの報告から、望ましい親子関係を探る。
事例会議に出席し、実際のケースからカウンセリング的な係わりかたを学ぶ。
- (5) 教育相談実習講座に参加し、研修の中から相手の気持ちを理解することについて学ぶ。

なお、この研究の仮説を次のようにたて、研究を進めた。

仮 説

教師が、日々の保育実践と記録の読み取りから子どもの内面を理解しその姿を母親に伝えていくことと、母親の話に耳を傾け共感して聞いていくことによって、教師と母親との相互理解が深まり、子どもの育ちが促進される。

II 内 容

1 幼稚園における連携とは

(1) ここで言う連携とは

ひとり一人の子どもとの係わりの中から、その子なりの成長の援助をしていくために、教師と母親が、協力し合いお互いを理解することと捉えたい。

(2) 連携を支えるカウンセリング

母親の話を「共感的に聞く」という観点から、カウンセリングの理論を取り上げた。

ロジャースは「来談者中心療法」の中で、セラピストの条件として、以下の三つをあげている。

教師とセラピストとは立場も役割も違うが、話を聞くときの態度として参考になりたい。

① 自己一致

教師が自分自身になりきることで、自分自身のありのままの姿を否定しないことである。このことから、教師は生徒や保護者との関係において、ありのままの人間であればよいことが言える。¹⁾

② 無条件の肯定的配慮(受容)

相手を大切にし、思いやりをもって相手に係わること。このことは、自分が相手を自発的に、心からひとりの独立した人格として大切にしている時におきるといえる。

③ 感情移入的理解

自分は相手の内面を内側から理解することができるかということです。自分は相手の内面をその人の目で見ることができるでしょうか。感情の中の世界を感受性豊かに動きまわり、その人がどんな感じをもち、表面的意味だけではなく、少しはその下にある意味まで理解することができるかどうかということです。もし、自分が、相手の体験の世界へ敏感に、正確に身を投ずるならば、変容への動きが起きやすくなる。²⁾

¹川崎市立川中島小学校付属幼稚園教諭(長期研修員)

¹⁾ロジャース全集第5巻 カウンセリングと教育 岩崎学術出版社 1968年

²⁾別冊 発達 カウンセリングの理論と技法 ミネルヴァ書房 1993年 74ページ

〈連携の必要性は〉

幼稚園と家庭との役割から考えると、幼稚園は教師との信頼関係を基盤にしながら、遊びを中心として、友達と楽しく集団生活を送る場である。家庭は家族から十分な愛情や思いやりを受けて、安心して過ごせる心の基地。

ここで親子関係の重要性を語っているウィニコットは、幼児の自我発達および情緒発達に關与する母親（環境）の存在を重視したのである。適切な母親good-enough motherこそが、幼児の情緒発達を促進し、本当の自己true selfの成長をもたらすという。彼が「母親」と表現する時、それは客観的に存在する母親その人をもみ指しているのではなく、育児の在りかたをも含めた母親という存在全体を意味している。

「幼児のいるところには必ず母親がいる」と言い、「母親は幼児とは対をなして、ひとつの単位状態unite statusをつくっている」と彼は表現し、幼児にとってのこうした母親の存在を、「環境」と呼ぶのである。³⁾

この、ウィニコットの言葉に付け加えるならば、教師もまた、幼児の環境の一部になりうる。

子どもの年齢が小さければ小さいほど親や教師との密着度が高い、そこで、子どもの環境としての役割を果たし、生活の場にいる教師と母親が、それぞれの目でみた子どもについて話し合うことが子どもの成長にとって必要である。

〈現在の母親のおかれている環境を考えてみると〉

母親自身が生育の過程で、幼い子どもの世話を直接に経験したり、それを観察することによって、育児の予備的学習をする場が少なくなっている。

家庭においては核家族化が進み相談相手になってくれるあいてが見つかりにくい、また、住宅事情もマンションなど人との係わりがつきにくい状況にあり自分の話に共感してくれる相手が見つかりにくい。母親の立場からいうと、相談をしたり、自分の話はきいてほしいが、教師からの質問などの形で、自分の内面にまで踏み込まれるのには、抵抗を感じているというのが現状である。

2. 振り返りの事例

（自分が係わりを持った連携について、文献や研修をしたことに照らし合わせ考察をする。）

事例Ⅰ 母親と教師との信頼関係を築くための連携、A君の母親との連携

〈A君について〉

・私立幼稚園に通園していたが、登園拒否（夜驚・ねぼけ）のため、3ヶ月で園をやめる。その後9ヶ月を家庭で過ごし、翌年、公立幼稚園に入園してきた。

・大人との係わりの中では、自分の思いを言葉に出して言うことが難しい印象を受ける。しかし、友達の中でのA君を見ると、サッカーなど戸外での活動で、リーダー的な存在で、遊ぶ姿が見られるというように、環境によって表出のしかたが異なる。

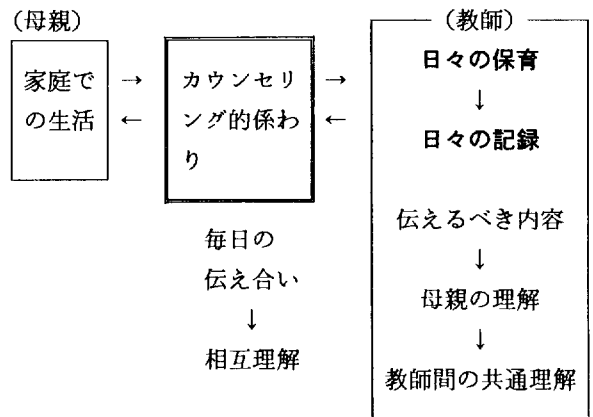


図. 〈幼稚園における保護者との連携〉

母親と教師の役割を左右に分けた。母親は家庭での子どもの様子を園に伝える。一方教師は、日々の記録の中から家庭に伝えるべき内容を教師間で共通理解し、母親のおもいを大切に伝える。カウンセリング的係わりをすることにより、相互理解を深める。

〈母親について〉

・A君が周囲の期待を集めて誕生してきた子どもであり母親も期待に答えるべく、A君に完璧さを要求してきた。そのため、自分にもA君にも厳しい。（A君には弟がいるが、弟に対する母親の係わり方は、ゆったりしている）

・育児書をよりどころにしている所が見られる。しかし本のなかに書かれていることが実践できないことをもどかしく感じている。また社会的に見てこのような母親が理想とするモデルが頭の中にあるようで、周りから見ると、良い母親であろうとすることから、母親にとっても子どもにとっても窮屈な環境を作り出しているところが見られる。

・母親にとっては家庭の状況が大変（障害を持つ弟と病気の母親をかかえている。）かと思われるが、自分の大変さを周囲に訴えることはしない。

〈母親との具体的な連携として〉

母親自身が、自分のかかえている問題から、子どもに対しての係わりが不安定になっている印象を受ける。母親の不安がそのまま子どもに反映しているので、まず母親の気持ちが軽くなるように、話し合いをする時間を多

³⁾ 「精神発達と精神病理」 金剛出版 1986年 49ページ

く持ち、気持ちの捌け口にしてもらえるように努めた。また、話の中から文章を書くことが好きだという話が出てきたので、家庭でのA君について書いてもらうようにしてみた。

〈振り返り〉

ノートを初めて間もないころは、A君の否定的な部分が多く書かれていた。しかし、聞いてもらえる相手ができたことに対する安心感からか、A君の話しだけではなく、自分自身の悩みや不満などに話題が広がってきた。さらに話を聞くことにより、A君にたいする接しかたが変化した。得意なものを見つけて家族で援助していこうとする姿や、できなくても待ってあげようとする姿が見られた。また、A君を言葉で動かすことが少なくなった。

ノートを使うことにより自分の気持ちを客観的に見つめ自分自身を振り返りながら、相手の話も受け入れていくことが、A君の母親の安定を図ることになり、A君に対して、ゆとりある対応につながったと思う。

事例Ⅱ 子どもを多面的に捉えていってほしいと思うB君と母親との連携

〈B君について〉

園での生活は楽しんでいて、どのような活動にも喜んで参加しているが、運動が苦手である。家庭でも室内遊びを工夫することから、外遊びの経験が少ない。

〈母親について〉

教師や友人の話を一生懸命聞き、自分の子育てに役立つことならば取り入れようとする姿勢が見られる。また、子どものためには、労力をおしまず努力する。B君が入園して初めての保育参観の日に、B君が母親の前で、やってみせたスキップを見て、他の園児の動きと余りに違うことがっかりしてしまう。この時初めて、B君が運動が得意ではないことに気付いたと、後で語っていた。

〈親子関係に目をむけると〉

B君のことが可愛いというあまり、できないことがあっても目をつぶってしまう所が見られる。また、B君が3人兄弟の末っ子のため、外遊びは兄たちに任せていた。

〈母親との具体的な連携として〉

B君を可愛いというだけの視点で見て、満足しているように感じたので、あえて苦手な部分も見せて、そのことから感じたことなどを話し合うようにしていった。

〈振り返り〉

わが子をいつまでも赤ちゃんにしておきたいという母親の思いを、子どもが生活していくためにはどのようにしていくことが望ましいのかを、共に考えた。明らかに母親も苦手かと思う活動を一緒にしてもらい、子どもの

できない部分に目を向けてもらうには、伝え手としては抵抗が感じられたが、この母親ならできるという信頼感が持てた。自分のために頑張っている母親を感じたのか、母親の自分を見る目の変化を感じたのか、B君も外遊びをきっかけに、成長が見られた。

事例Ⅲ 親子関係をより深くするためにとったC君の母親との連携

〈C君について〉

体は大きい、集団の中では萎縮した印象を受ける。教師との係わりを求めているが、自分の要求を口に出さずに、教師のまわりを鼻をクンクン鳴らしまわりつく。

家庭での様子を聞くと、母親に対してはいばっている。

〈母親について〉

C君との係わりを見ていると、自分の言うことを聞いてくれないC君に困りながらも、強く出ることはしない。

自分の意見を強く押し出すことはせず、大切な判断は父親に任せている。

〈親子関係に目をむけると〉

C君の弟が病弱だったため、母親は弟にかかりっきりという状況が続き、そのためC君と母親との関係が希薄になっていったと思う。C君は甘えたい気持ちが随所に見られるが母親に対して出していない、どちらかと言うと、母親の前では大人っぽくふるまっている。母親もC君の気持ちをどのようにして受け止めていけば良いのかが分からない様子である。

〈母親との具体的な連携として〉

親子で話をする事により、C君の違った側面を発見してもらうこと、また、話をきいてもらえたという安心感からC君の情緒が安定してくるのではないのかと考えた。家庭の中で、ひざにのせて話をする時間を持つこと、C君が要求したら、一冊で良いから絵本を一緒に見る時間を持つことをすすめてみる。(親子で同じ経験をするための、心地よさをあじわってほしいと願った。)

〈振り返り〉

母親の様子を見ていて、いきなり教師にべたべた甘えているC君の姿を伝えるのは難しいと感じたので、まず教師の話が受け入れてもらいやすい雰囲気をつくるように心掛けた。母親も話がしやすいように、母親自身の話を聞き、C君の良いところを話すようにした。

母親は、だっこやおんぶは赤ちゃんのすることと考えていたようだったが母親に甘え、園での話や、自分の要求を言葉であらわしているC君を見て、このような係わりも大切だということに気づいたようだった。

毎日、母親が園に来ているからといって、全部を母親の判断に任せるのではなく、父親に対する働きかけがあっても良かったと思う。母親も協力してもらえること

で余裕ができたのか、自分のペースで動けるようになっていったと思う。

——事例の考察——

・連携という視点で母親との係わりについて考えてきたが、この中で母親に伝えたいと感じたことは、子どもを多面的に捉える視点や、子どもの話に耳を傾けようとする姿勢である。このことは、特定の母親だけではなく、多くの母親についても伝えていきたい。と同時に、教師自身についても必要なことと思う。

・母親は子どもの喜ぶ姿を見て、同時に楽しいと感じる。また、母親のそんな姿を見ていると、子どもは安心し、安定する。このように、母親の情緒の安定と子どもの成長には深いつながりがあると思う。この母親と子どもの関係の援助をしていくことも、連携の持つ役割と思う。

・母親と子どもについて話し合いをしている中で、子どもの状態像についてくい違った部分を感じた時、(たとえば、園と家庭での子どもの表出のしかたの違い、教師と母親との視点の違い。)その部分が、その子どもについての話し合いの窓口となるべきところであると思う。意見を押しついたり、引き下がったりせずに、お互いが分かりあえるまで、話し合う必要があると思う。

・教師が子どものことを思って言う言葉の中には、母親には意外な言葉であったり、不信感を抱かせてしまうものもある。伝えるべきことと、伝えずに、子どもとのかわりの中で、考えていくべきものがあると思う。

Ⅲ 考 察

(1) 理解すること

子どもを理解することが母親の理解に直接つながるといことは断言できないが、子どもとの係わりを深めることにより、子どもの背景となっている様々な要因(家庭環境、親との係わり)が見えてくる。母親の存在も子どもにとっては環境となるものなので、子どもを見ていくことにより、母親に何を伝え、どのようなことを話し合っていくことが望ましいのかが分かってくると思う。

(2) 聞くこと

話を聞くということは、事実を内容だけで理解することではなく、母親の語る子どもについての話を、同じ思いで聞き、自分がその話を同じ経験をしているように聞くことと思う。そのことができた時、相手の話を共感して聞けたと言えると思う。

(3) 伝える(話す)こと

子どものことは、母親が一番よく知っているということを前提に考えていきたい。

教師の話の内容について、母親自身気がついていないがらどのように係わっていけばよいのか迷っているのかもしれない。母親の悩み、迷いをどのように受け止め、ど

のようにしていけば共に考えていくことができるのか。そのことを考えるべきだと思う。

(4) 連携を図ることによって

教師が母親の話を共感して聞いていくと、母親もまた教師の話を「聴いてみよう」とする姿勢がでてくる。このように「連携する」ということが片側の姿勢のみではなくお互いの相互作用があってはじめて達成されると言える。

親に協力を求める前に親と協力していこうという教師の姿勢こそが大切だと思う。このようにして、教師と母親との信頼関係ができ上がることが、子どもへの係わりにとって大切なことであると思う。連携を通してめざしたかったのはまず、相手を信じて添って試してみようとする関係作りだったのではないかと感じる。

保育の始まりはそこからであると思う。

終わりに

この一年間の研修を終るにあたり、話を聞くことの大切さ、自分自身に目を向けることの難しさを改めて実感しました。今後の保育、および保護者との係わりにおいて、参考になることを数多く得ることができました。このような機会を与えていただいたことに感謝すると同時に、ご指導いただいた、室長、指導主事、相談員の皆様に心よりお礼申し上げます。

・参考文献

文部省

「家庭との連携を図るために」 1992年

氏原 寛・東山 紘久 編

「カウンセリングの理論と技法」

ミネルヴァ書店 1993年

河合 隼雄

「カウンセリングと人間性」

創元社 1975年

ベルトラン・クラメール

「ママと赤ちゃんの心理療法」

朝日新聞社 1994年

・指導助言者

川崎市立田島養護学校 学校長

木村 巖

川崎市総合教育センター研修指導主事

株本 秀信

・研究協力者

川崎私立川中島小学校付属幼稚園教諭

角田 恭子

河内 澄子